平成 26 年度　帰国隊員/青年支援プロジェクト

報告書

2014 年 12 月 26 日から 2015 年 1 月 4 日の期間において「ネパールにおける障害児者の地域支援活動」をさせて頂いた。

Ⅰ．ネパールの情報

ネパールは、人口約 3,000 万人、面積は北海道の約 1.8 倍という非常に小さな国であるが、世界の最高峰エベレストが存在することで有名である。医療事情に関しては、主要都市には病院や障害者施設があるものの、村落部にはそのような施設は整っていない。そのため、医療機関が少ない村落部では、伝統医療に頼る人が多く呪術医が治療を行っている。その患者さんの中には、壊死、感染して死に至るケースも少なくないという。また、教育に関しては、小学校への就学率は 90%を超えているが、留年制度が存在するため、退学する学生も少なくない。全ての健常な子どもたちも学校へ行けない現状の中、障害を持った子どもたちが学校へ行くという考え方があまりなく、むしろ差別されている。障害を持ってしまうのは、前世の報いであると考えている人も多い。また、村落部の山道では、障害児者が外出することも非常に困難であり学校へ行くことができない人も多い。福祉制度においては、障害者手帳制度も導入されているものの、手帳の存在を知らない人が多く、登録もあまり進んでいないのが現状である。

Ⅱ．ダディン郡での活動

活動させて頂いたダディン郡アルバス村は、首都カトマンズから約 100km 離れた地域である。距離は 100km であるが山道で道路状況が良くないため、村の最寄りのバス停まで 4 時間程かかる。村の人々はそのバス停から 2 時間程かけて歩く。

今回、ダディン郡アルバス村において二つの活動を実施させて頂いた。

一つ目は、障害のある子どもがいる家庭への訪問である。子どもは知的障害の男児であった。発語はないが、短い言葉は理解しており、日常生活の活動（食事、排泄、更衣）は、誘導があれば自立できる子どもであった。ただ、親御さんはどのように手助けをしたらいいのか分からず、過介助になり困っていたため、親御さんが楽に介助できる具体的な支援方法を伝えた。また、学校へは行っていないため、家でできそうなお手伝いも伝えし、こちらで作成した玩具もお渡しした。ただ、親御さんが一番心配しているのが、学校へ行けないことである。家族は農業で生活を営んでおり、時々、マーケットに行って野菜を売り現金収入を得ている。従って、現金収入もそれほど多くはない家庭である。学校へ行けないことや生活に関しては、私たちだけでは解決できない課題であり、村長さんを通して、学校委員会等で話し合いの機会を持ってもらうようにお伝えした。

二つ目は、障害のある子どもと健常な子どもとの交流活動である。ゲームや折り紙を実施した。ゲームは、日本の‘だるまさんがころんだ’‘ハンカチ落とし’やネパールで流行っているゲームも教えてもらいながら実施した。

障害のある子どもたちと健常な子どもたちが一緒に活動できたこと、家庭訪問を通して障害のある子どもや家族の話を聞き、生活指導ができたことは大きな進歩であったが、村の人々が中心になり、障害のある人と健常な人とが共生できる地域づくりを実施していく必要性を感じた。特にカースト制度に関しては非常にシビアであり、共生するために住み分けをしているという面もあるため、地域づくりを考えるに当たって、ネパール人主体で考えてもらうことが非常に重要になると考える。その人々をどのよ

うに支援するのかを考えることが私たちの役目であると痛感した。まずは、NGO のカウンターパート(ネパール人、ネパール在住)を通して進めて行けるよう話し合いをする方向で考えている。

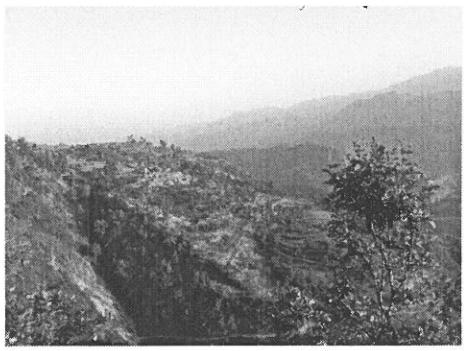

写真１．ダディン郡アルバス村

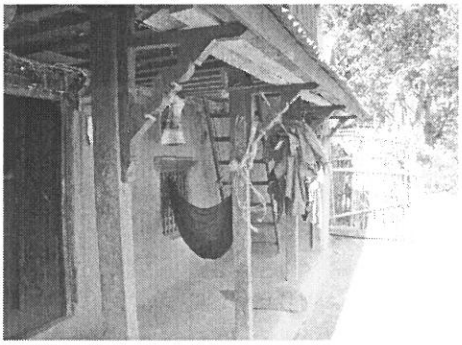

写真２．訪問した家庭

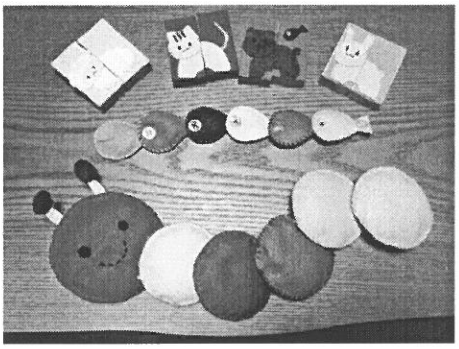

写真３．提供した玩具

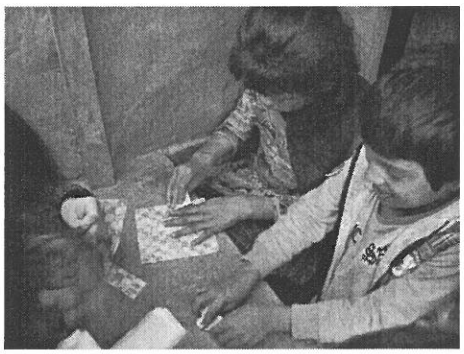

写真４．交流活動（折り紙）

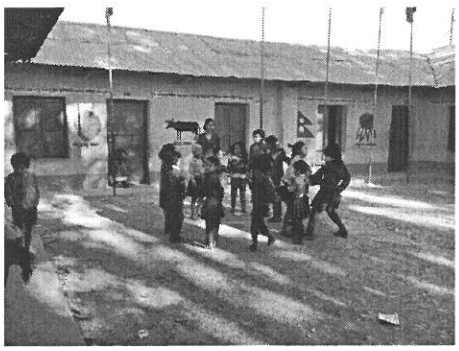

写真５．交流活動（ゲーム）

Ⅲ．Voice of Creative Disabled Nepal での活動

Voice of Creative Disabled Nepal は、首都カトマンズにあり、村で教育を受けることができない障害のある女児・女性（利用者）が生活しており、現在、教育支援と生活の保護を目的に運営をしている。現在、小学生から大学生までの 15 名、脳性麻痺、脊柱変形、切断等の女児・女性が生活しており、多くは遠方の村から来ている。村で差別されたり、両親から育児放棄された女児もいる。

今後、就労支援も事業として取り入れていきたいと当団体の代表者は考えており、就労支援を行うための前段階として以下の取り組みを実施させて頂いた。

今回は、ポストカード作りと箱作りを実施した。

工程を以下に分け、それぞれの利用者ができる工程を選択し、実施してもらった。

１．ポストカード作り

①ポストカードの作成（長さを図る。定規で線を引く。切る。）

②絵柄をつける（絵を書く。色を塗る。切る。貼る。スタンプを押す。）

２．箱作り

①箱の枠作り（長さを図る。定規で線を引き枠を書く。切る。）

②模様づけ（模様紙を貼る。切る。名前を書く。）

ネパールでは「図工」という科目はないため、物を作ることが初めての経験だった利用者も多かったため、定規の使い方から説明が必要であった。しかし、何回か行うことで少しずつ上手になってくる利用者もいた。今回は、物を作ることの楽しみを知ることができたようであった。今後、販売できる完成度の高い作品を作れるようになることも必要になってくると感じた。作り方は伝えてあり残った材料も置いてきたが、自分たちで作品作りに取り組んでいるか定期的に確認する必要がある。

そして、代表者や運営スタッフと就労支援につなげていくための話し合いを実施した。障害者が仕事をすること自体が非常に難しい社会であり、障害があるだけで会社に雇ってもらえないことも多い。もちろん社会に対する啓発活動も同時に進めて行く必要もあるが、サポートするスタッフの力も借りながら、何らかの形で現金収入を得られる手段を見つける必要がある。また、ネパールにある障害者の就労を支援している施設や職業訓練施設と情報交換し連携していく必要性を確認し、販売先については、障害者関連のイベントや他の障害者団体の情報も得て、協力してもらえるところを探す方向で話合いを進めた。

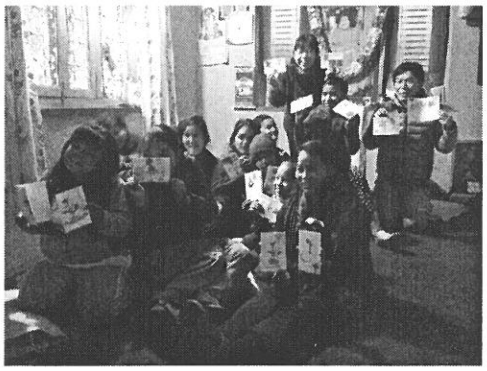

写真６．ポストカード作り

写真７．箱作り

Ⅳ．謝辞

年に１回の頻度で現地に渡り支援をすることの難しさを痛感しましたが、現地の人々が主体で活動し、現地の障害者を含む人々をエンパワメントできるように支援するのが本来の国際協力であることを認識させて頂きました。現地の人々の考え方や行動が変われるよう、現地に合った支援方法をさらに検討していきたいと思います。

今回の活動に多大なご支援を頂きましたことを心より御礼申し上げます。